事情 明治太平記

村井静馬編輯

四編

下

へ14
2504
8

門 八 遠 14
號 2504
巻 26-8
特

村井靜馬編輯
鮮齋永濯畫

官許

明治太平記 全

東京書林 延壽堂發兌

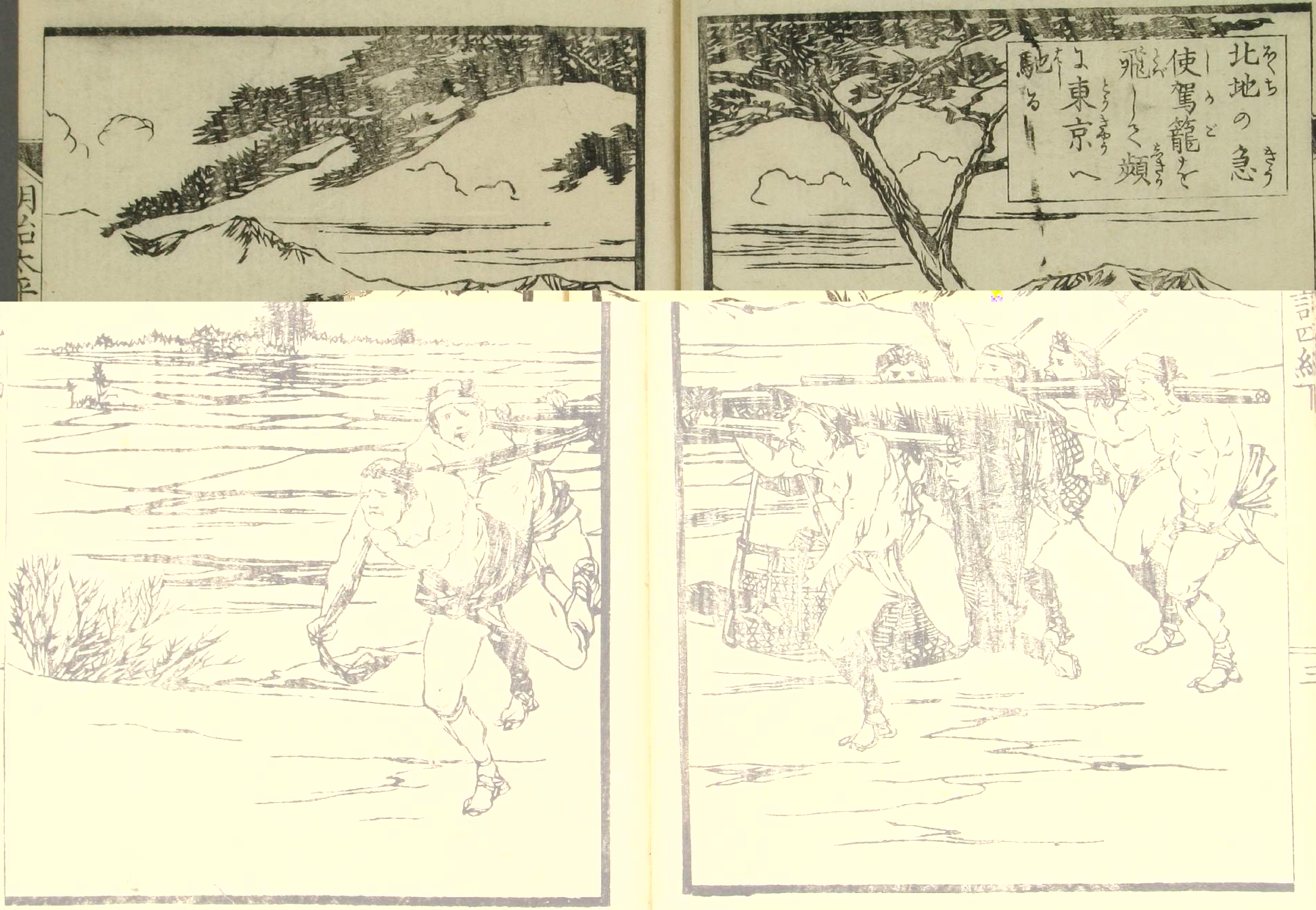
明治太平記四編巻之二

東京 村井靜馬編

尒程に脱兵等ハ舘村の城を抜きて這地へ大畧所有とあつまりしが尚残黨を追撃なさんと江刺及び鶉村に屯集なしたる陸兵を熊石にさし向て一挙に之を破らんとせしに這所に備へし新田主税ハ衆寡の敵しがたきを度り従兵三百餘名と倶に賊兵に降りしかバ脱徒等兵を交へずしてかの熊石をも乗り取けり

尓バ榎本等甲乙を斯く勢ひを得たりしかバ奥羽の諸藩を伏ざせんと書を各藩に送りて曰く我が輩國を脱してより身を容るゝ地なけれども又降伏して謝すべきの罪なし茲に蝦夷地にて皇国の北門にありて樞要の地なるをもて開拓の基を創め永く外夷窺窬の念を絶んと曩に朝廷に歎願すれども允准を蒙る事能ざれバ是に於て同志の輩緩急疾徐の機を辨じ自から此地に来りて箱館知府事に此旨許へんとして使者を馳せしに箱館府の小吏等が胆小く畧浅く却ッて我を撃んとする故我が輩も又兵を出して姑く防戦に及びしに渠箱館を捨て去り又松前家も我が意を知らずして猥りに兵を我等に加へり我また已を得ざるゆゑこれと抗戦なしつるに渠その如ざる事を知りてや城及び民家までも燔拂ひて退去せり我その疎暴を怒ると雖も民の塗炭に苦むを傍観なして居るに忍びず

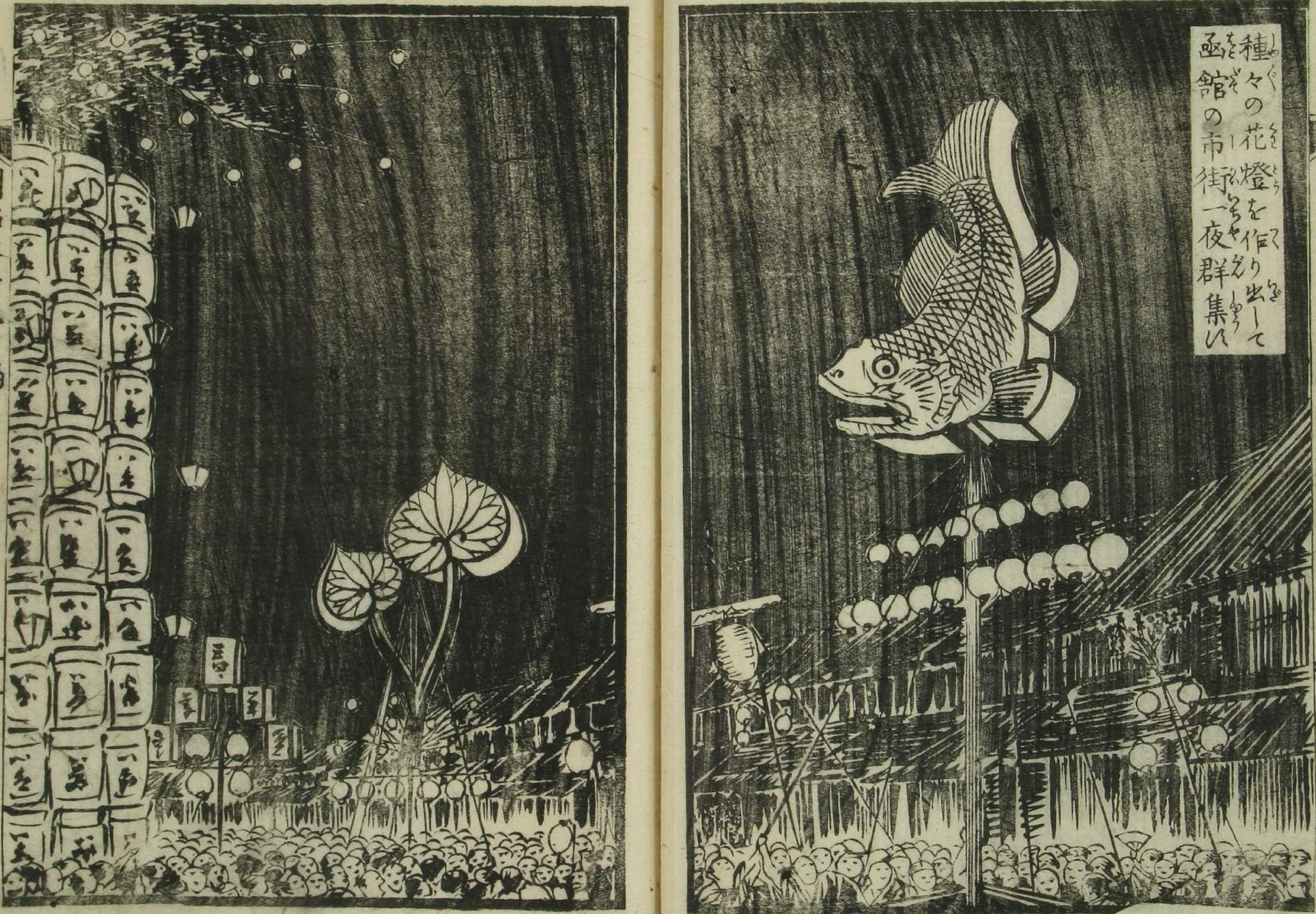
今正に夫等が疾苦を救ふを以て専務とせバ我が輩固より松前藩にも恨むべき事あるにあらず況て奥羽の列藩とや然れども奸佞饒舌の徒王命を矯くめて妄に我等を襲撃せんと奥羽の兵を濆すものあらん列藩我等が寃を愍み且つ我輩の素志を察し日本北門の為にしも篤く尽力あらんことを請ふ倘然らずして徒らに我等を目して賊となし藩々兵を出さんとならバ我もまた已を得ず必死の防戦なすのみなるぞ直ちに城地に逼らんなど威を逞しく記したり是より先清水谷侍従も函館を退去して津軽の青森に至るや否や判事堀真五郎東京に馳至りて脱艦蝦夷地に襲来して勢ひ最も熾んなれバ函館府を保ちがたく知府事をはじめ青森へ引退きたる事の趣き箇様々と報知る程に又日ならずして松前の諸城悉く落去して蝦夷地へ總て賊徒等の所有となりし事なんど急使を以て告知



北地の急使駕籠を飛して頻に東京へ馳る

来る事最も頻りありしかバ朝廷大いに駭かれて種々評論に及ばれたる上更に徳川亀之助に脱艦追討の命令を下し給へる其略に曰く曩に脱艦の賊徒等が置く処の書を閲するに侮慢不敬のこと多かれば當今に至りてハ此地に於て暴動をなし地方の列藩を攻撃す其罪伐せざるべからず然り而してその藩たるや既に恭順を主とせしを以て藩屛の列に加はれバ急に此地へ出兵して賊徒を征討せよとなり

仍て徳川家に於ても朝旨を遵奉ありと雖も藩主ハいまだ幼稚なる故則ち松平確堂より朝廷に上書して曰く這回賊艦追討の命欒藩に下し給ひて日夜痛心速かに實効を奏せんと欲す然れども幼年の事なれバ指揮の届かぬ事もあらんと大いに苦慮する所なれバ適ま寛大の殊旨を以て徳川慶喜を亀之助に代らせられん事を請へりあしにより朝廷にて尚も再議に及ばれしに其頃徳川民部



種々の花燈を作り出して函館の市街一夜群集ス

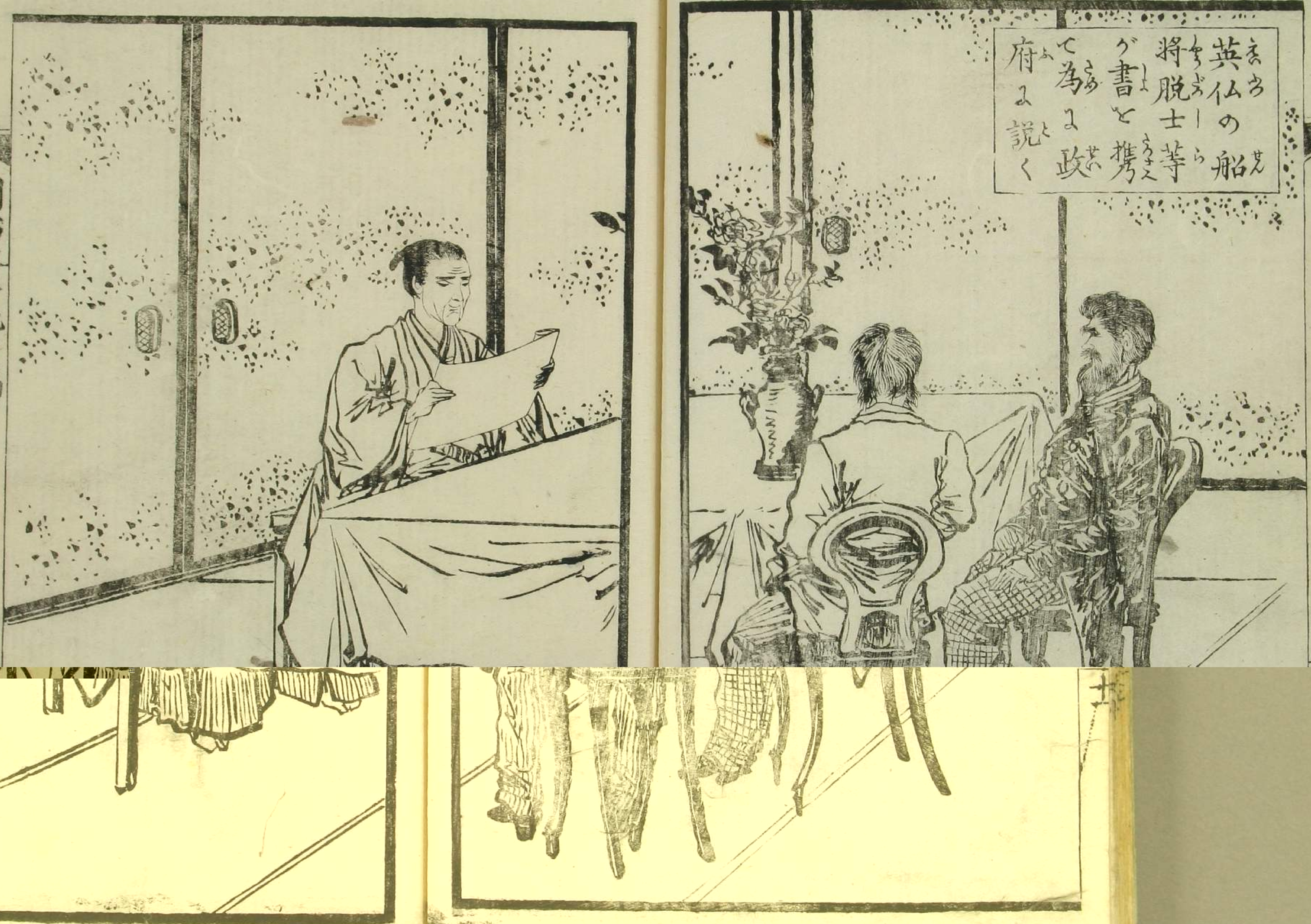
ともに嶮難を衝き萬死を冒し終古未開の蝦夷地に移り榛莽を開拓し無用の人を驅りて有用の業を興さしめ聊か天恩の萬分の一を報ぜんと欲するが故に曩に歎請に及ぶと雖もいまだ允准を蒙らず遷延虚しく日を送り[illegible]彼三十万に及べる者竟に餓死せんと必然なると臣等坐視して在るに忍びず因て品海を出帆徹し烈寒風雪を厭はずして争で蝦夷地を開拓し北門の警衛を做さんと去る十月此地に来るに清水谷侍従等ハ毫も我等が言を採らず唯一向に賊と目して妄りに我輩を襲撃し又松前の藩に於ても我が送り[illegible]る使者を殺して頻りに疎暴乃所為に及べ已むを得ざるの所より遂に渠等を除却做せしに方今農商業を安んじ人心大に帰依するに依り既に山野[illegible]と開墾せしむる故に歎請する所を此地を舊主亀之助に賜ひなバ適も北門の護衛をなして永く天恩に報ふべし我が輩固より肩ある

れど是が主長とする者なりしかバ手足頭目の別なきが如く開拓護衛も十分に届きがたき所なり因て徳川血統の者を選び大臣を總裁せしめんに衆なる感激奮勵して不毛の僻地も忽ち変じて富饒の郷となり北門の警備も遂に金湯の固きと為さん然らバ邦内の利益を與し外寇の防禦厳なるべし實に方今の急務とするもの只此一大事件になり當春以来國内に於て兵禍頻りに絶ずして萬民

塗炭に苦しむも兄弟墻に鬩ぐの類にて畢竟皇國の衰弊を相促すに似たれバ他邦の笑ひを免れ難し故に我が輩戰闘を固より好まざると云ども着岸以来兵端を啓くハ實に已む事を得ざる所の情實に出るをバ弁へ天監を仰ぐのみ依て英仏の船将を介し我等が丹心石腸を述る所斯の如し伏て請ふ皇慈垂憐して此願ひを聽さん事をと斯の如くに認めたると彼船将に渡しけり此とき

又脱兵等ハ假に其首長を置んと亞米利加共和政治の例に傚ひ衆兵に入札せしめて其人を公選做し乃ち榎本釜次郎を總裁に松平太郎を副總裁に荒井郁之助を海軍奉行に大島圭介を陸軍奉行に充て五稜郭を本営と定め人見勝太郎を松前奉行に松岡四郎小杉雅之進を江刺奉行に永井玄蕃中島三郎助を函館奉行となし其地方の庶務を總しめ且蝦夷地の開墾を盛んにせんと澤

太郎左衛門をして開拓の奉行とし其東地「セルラン」へ二百餘人を移住なさしめ「ヲタルナイ」及び「ヲタスツ」等の各地方へ兵隊を置くヿ各一小隊又海岸山道の要地数ケ所に砲臺を築きて其地を警衛せり然るに英佛の船將等ハ彼脱兵等が奏表を携へて是を政府へ差出して尚彼輩が素志を演べ兵を解かしめんと議すると雖も朝廷書辭な無礼なりとし更に採用なさざるにぞ船將等も



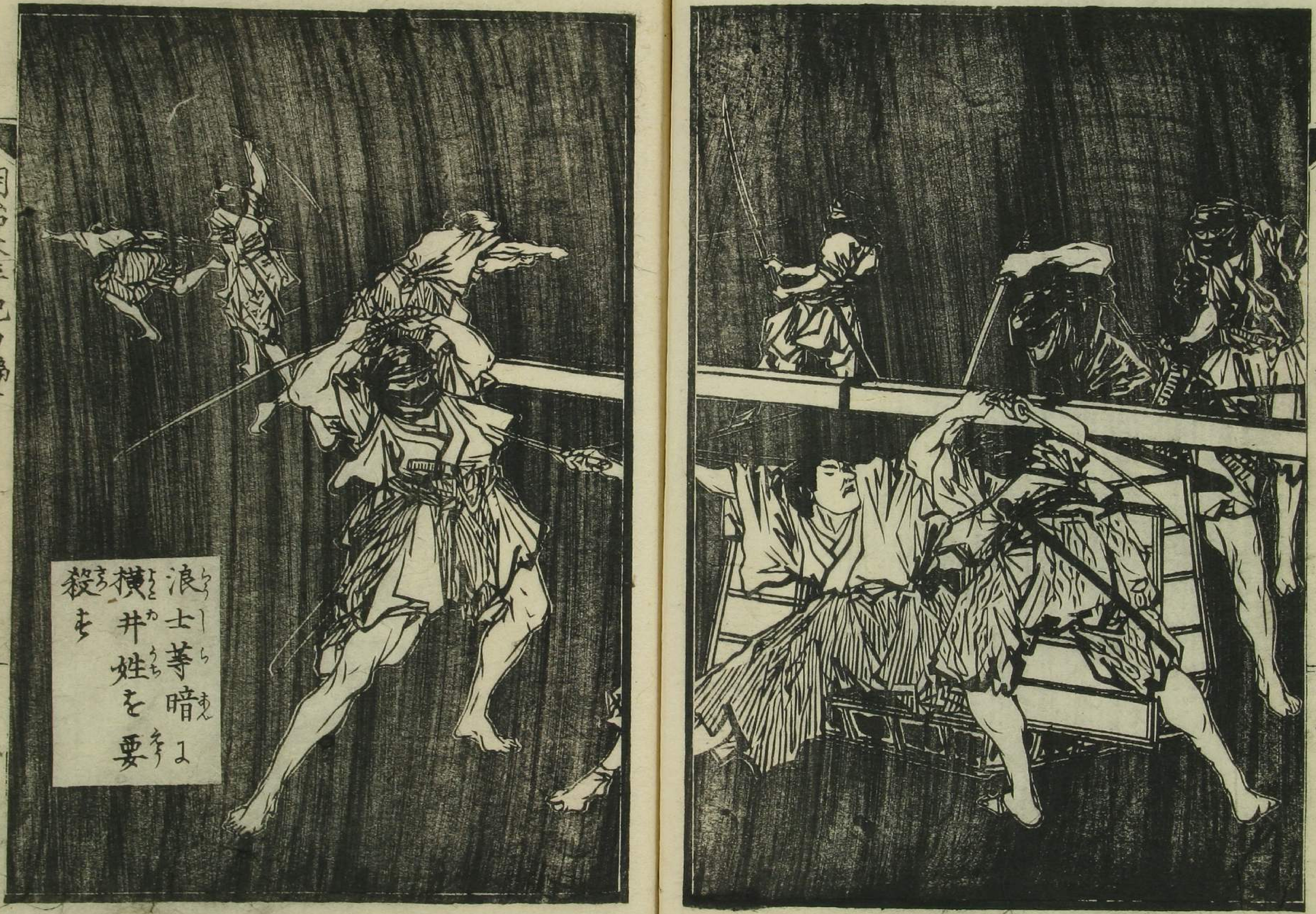
英仏の船将脱士等が書を携て為に政府に説く

[redacted]

詔して横濱に赴かしめ英米其他各國に局外中立を止させんことを議し別に書を與へて曰く今奥羽越の背藩の輩已に降伏謝罪して各誓紙を差出し政府の裁決を仰ぐとのみて邦内復政府に抗する者なく全國平定して政令一途に出づ故に今より軍艦戎器を我が政府に賣り渡し或ひハこれを貸さんと復決して異議なきやう請へるの旨を書載す仍て各国の公使等より局外中立を廢すること謹んで命を奉ぜん

然れども此令により各國約する所なれバ不日會議を做したる上之を停めんと答へしが幾程もなく廢せしなり茲に亜米利加國よりして既に此年夏の頃甲鉄艦一艘来りて横濱の海岸に繫げり這ハ其もとハ徳川氏の米國より贖へる船にて當夏此港に来るや否や政府よりして掛合に及び之を収めんとせらるれども米人局外中立の令を執りて姑くこれを與へざりしが此時に至り各国共中立の令を廢すれバ政府

乃ち米人を諭して遂に其船を得たりとぞ左右する間に其年も暮て明治二年の正月に至れり天皇響に東京に在せしが旧臘還幸ありて今西京に在ませバ公卿諸侯百官有司みな入朝して正朔を賀まつ斯て此月五日に至り京師に於て不時の変あり其故を尋ぬるに参與横井平四郎といふ人御所より退出做せる途中寺町通り丸太町を過らんと為たるとき六人の浪士ども頭巾を以て面を覆ひ路の傍に潜み居たるが忽ち一人進み出て平四郎が乗りたる駕籠に短筒をうち蒐れバ自餘の五人も白刃を抜き連れ右左りより逼りたる勢ひ斯の如くなれバ横井ハ駕籠より出る隙なく僅かに短刀を引抜きて當り合はんとする折しも一個の浪士が横合より躍り掛りて平四郎が肩先深く斫込みて直ちに首級を打取りし時に平四郎が従者なる横山助之丞下津鹿之助等主人の危急と見るよりも死を顧みず防



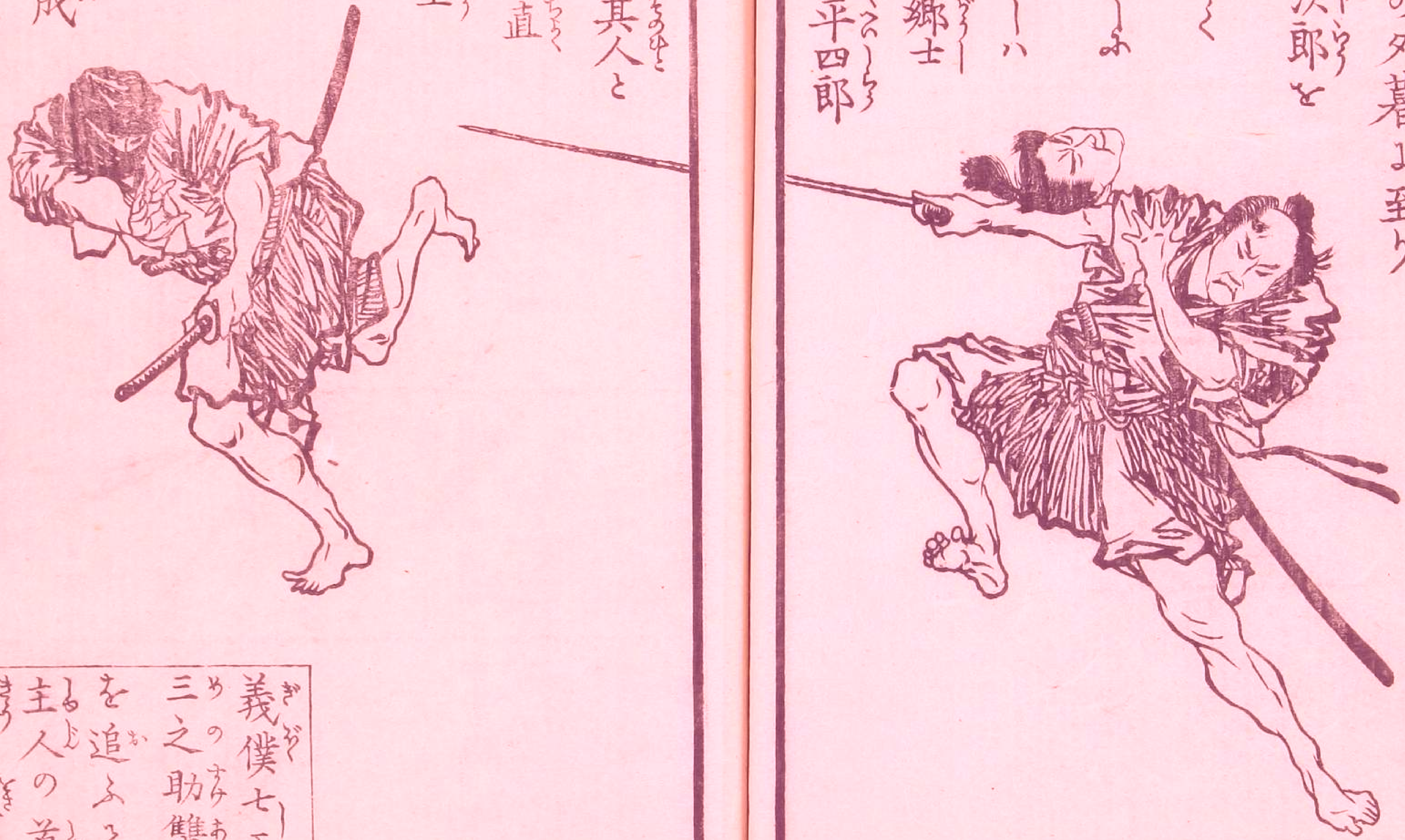
浪士等暗に横井姓を要殺す

戦して浪士にも痍を負せしかど其躬も傷を被りて主人を救ふことを得ず然るに此丸太町ハ横井が家に程近かれバ若黨吉尾七五三之助なる者留守を預り居たりしが始め短筒を打掛たる其砲聲を听と斉く何事やらんと駈出し見れバ主人ハ討れ従者等も咸痍を負ふて仆れ居たれバ駭く支限りなく既に相手な去りたる跡ゆゑ浪士等の逃たる方を道路の人に問ひ糺し刀を拔て追かけて大概四町餘りにして追付ことを

得たりしかバ主人の讐と喚りながら飛び蒐らんとする形状の勢ひ最も烈しかれバ浪士等大いに狼狽なし持たる首を打つけて後をも見ずして逃行くにぞ七五三之助ハ主人の首級を拾ひ上んとする虚間にはや浪士等ハ何地へ行けん影だも見へざりけりしかバ再びあとを追ふに支悵なれば心中遺憾に堪やらねど首級を讐の手に置かず取返せしを幸ひにして其儘家に立皈り仔細を官府に訴へしかバ官吏等四方に

手分しく普くおとを尋ねしが既は其日の夕暮に至り浪士益田次郎を捕へて嚴しく鞠問に及びしに横川を害せしハ皆十津川の郷士なりとぞ抑平四郎

と喚るゝハ其人と為り純厚直實て勤王の心氣最も厚く共に中央の功業を賛成せ近世の英雄なりしく私怨を人に結ぶ



義僕七五三之助讐を追ふて主人の首級を収む

べき者にしもあらざるを今此害に遭へる吏世の人其故を知る者なし或ハいふ平四郎嘗て政体を一変せんとの持論なれバ嫉んで事に及べるならんか偖て此年三月に至りて天皇再び東京に臨幸あり公卿諸侯を此地に召され政道の基本を諮ねて宜しくその公論を採る是より天皇永く東京に在り人或ハ言ふ内旨都を遷せるなりと是より先青森に退去なしたる清水谷以下の面々ハ争で恢復を図らんと官兵の来り

向ふを日夜渇望なす程に賊軍の勢ひハ日を追ふ侭に盛んにして遂に賊兵内地へも襲来すべきの風説もあられバ躬方固より小弱なるゆへ一同大いに苦慮なして屡急使を東京へ馳せて兵の至るを促せり因て三月中浣に及び朝廷方に函館の脱兵を追討せんと諸外國の公使に告て彼港に在留做す外国人等を立去しめ更に海陸の兵に令し伏水の親兵函館の府兵その他薩州熊本長州備前水戸藤

堂久留米福山弘前松前徳山大野黒石等の諸藩の陸兵凡六千五百人日を分ちて函館に向へバ水軍ハ品川四方一土方堅吉赤塚源六等の数名甲鉄艦朝陽艦春日艦丁卯艦陽春艦以下の数艘を率ひ品川浦を出帆して左右して此船々ハ南部の宮古港に着帆せり爾れバ脱兵等ハ大軍襲来るべしとて豫く期したる事なれバ諸方に哨探を出し置しに既にして甲鉄以下の数隻の軍艦東京を発し向へるよしを聴く

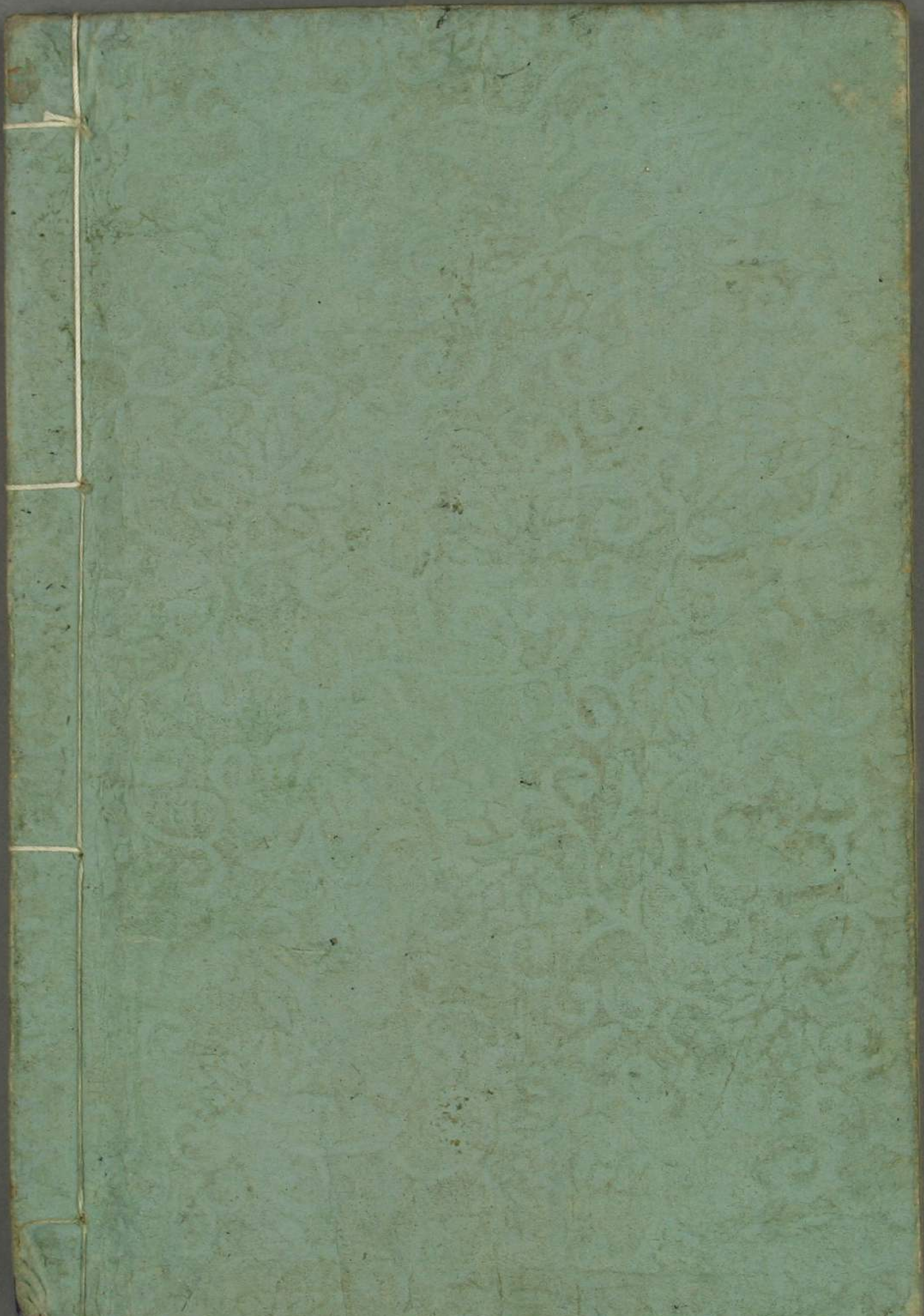
よりも勢ひ斯の如くなりしバ居ながら敵を俟つべきなるにあらず此方よりも軍艦を発し敵の由断を劫かして折よくバ甲鉄艦を奪ふて所有と做すならバ躬方の幸福此上なるべしと賊将荒井郁之助土方歳三等甲乙に則ち回天蟠龍高雄の三艦を率ハしめ函館港を発艦せしに洋中におゐて颶風に會ひ大ひに荒波に悩まされて三艦ひとつに在る事能ハず稍三方に離散せり其が中に回天丸のみ辛く風波を凌ぎて廿五日

の勅[illegible]明に彼の宮古港に近付て遥かに港中を見る処甲鉄[illegible]その餘の軍艦も[illegible]碇泊して居るのみぞ脱士等何ぞ[illegible]も憤懣に堪ず蟠竜高雄の二艘の兵は後れていまだ[illegible]来らずとく猶豫なすべき時ならずして敵船七艘なる[illegible]中へ只一艘にて乗込みたる此戦争の赴きは次の編[illegible]中委しく記すべし

明治太平記四編巻之二終

明治太平記 自初編 追々出板 村川静馬編集 鮮斎永濯画圖

報國[illegible]魂 彩色入 追々出板 滌嶋延房編輯 孟齋芳虎画圖

日本橋通三丁目
延壽堂 丸屋鉄次郎出版